

晴 出勤 午前十時和田英作氏來訪 校長問題に就き校内にては和田氏を推すことに異存はなき様子なるに付き和田氏の肚裏如何と尋ねしに推舉を蒙るならば美術家としては大犠牲なるべきも就職する考なりと答ふ 仍て本日午後早々文部省に赤間〔信義〕局長を訪ひ美術學校長後任には和田英作氏可然旨を余の意見として内申しおきたり

正木が和田を推したのは、和田という人物に信頼を置き、その手腕に期待をかけていたことと、もう一つ、左記のような理由があった。

私の在職中に色々念としてみた事柄は、此の美術學校は歴史のある古い學校でありますから、何でも卒業生でやつて行けるやうに、それで卒業生の發達に骨を折つて見たいと考へて、機會のある毎に此のことを力めてみました。今度和田先生が學校長になられたと云ふことは、最早學校のことは學校出身の者でやつて行くことが出来る、世の中の美術のことも大體學校の卒業生でやつて行ける、と云ふ實例を示したものであります。

〔正木前校長の生徒一同に対する挨拶の辞〕『東京美術學校校友
会月報』第三十一卷第三号〕

正木の内申は直ちに文部大臣鳩山一郎に承認され、和田英作が校長に任命された。

⑤ 和田英作の校長就任・大観の攻撃

昭和七年五月三十日、西洋画科教授和田英作が校長に就任し、赤間信義は校長事務取扱の職を解かれた。和田の経歴については既に本書第一卷330頁や第二卷63頁その他に記されているが、なお補足すれば、和田は明治三十六年教授就任以後、西洋画科の実技指導の外に、几帳面な性格と事務的才能を發揮して同科の運営につとめ、よく黒田清輝を補佐した。また、同四十年文展開設以来継続して審査委員をつとめ、大正八年帝国美術院会員となり、その間政府の各種博覧会、展覧会の審査や出品事務に携わった。その経歴は、「和田さんは岡田三郎助さんとともに、明治大正洋画界の最高峰黒田清輝さんの双翼として坦々たる出世街道をたどった人である。美術學校卒業後助教、外遊、ついで教授、文、帝展審査員、芸術院会員、帝室技芸員、文化勲章、同功労賞といった工合に美術家としての名譽の一切を授けた幸運な人である。」（坂崎坦「和田さんの芸術」『和田英作遺作展』昭和三十六年、朝日新聞社）と評される。画家としては白馬会展、文展、帝展、光風会展等に主に写実主義的作風の風景画、肖像画、花卉を出品した外、壁画の制作にも意欲を示した。

ところで、和田の校長就任は、それが本校設置以来初めての作家校長であり、しかも和田が洋画家であったことから、派閥抗争の渦巻く美術界に新たな騒動を呼び起こすことが懸念された。そのためか、各新聞がこの記事を大きく掲げており、その一つ、六月十四日の『読売新聞』は次のように報じている。

彩管を投げ捨て

和田美校長が悲壯な決意

一官吏として教育事業に専心

後任難の殻を突き抜け學内の輿望をおうて今度東京美術學校長の椅子についた我が洋畫壇の耆宿和田英作氏は久しく悩まされた盲腸炎も全く癒え去る八日から登校校務を見てゐるが氏は今回の校長就任を機とし過去四十餘年間の畫家生活を清算し彩管を捨てゝ一官吏として美術のため終生一身を捧ぐべく悲壯な決意を堅むるに至つた。

其の爲數日前數年來も育てて來た和田教室員に對し別れの言葉述べたところせめて今日一日だけでも指導にあづかりたいと涙ながらに切なる情をうつたへ氏も思はず感激の涙にむせび美しい劇的シーンを演じたといふ、校長としての氏の今後の活動振りは各方面から期待されてゐる

右につき和田校長は語る

「實技家、而も洋畫から校長を出した事についてはいろ／＼の批評もあらうが不束ながら校長の椅子に就いた以上は私には日本畫もなければ洋畫もない、勿論今後は一切繪筆を捨てゝ一校長として死ぬまで奉公する決心だ、たゞ明治奉讀會の壁畫だけがまだ残つてゐるのでこの夏休に之を描き上げ後は畫壇と絶縁する覺悟である、そして役人としてゝはなくおやじとして學生と心の結びをつけようと考へてゐる、どうか長い目で私の今後を見て貰ひたい」

しかし、和田がこうした決意を以て校長に就任したのに対して、果たして横山大観は次の意見書を發表して攻撃した。

東京美術學校改革意見

美術教育の根本精神を論じて當面の問題に及ぶ

横山 大観

(一)

唯一の官立である東京美術學校については、從來しば／＼識者間に改善の論議がなされて來たのであるが今回首腦者の更迭を機として更に各方面より種々の意見が開陳されるものと信ずる。本社はこれが第一聲として同校の出身者であり嘗ては親しく教^レべんとられた横山大観氏を煩はし、氏が多年包懐して居られる東京美術學校改革案を草していただいた。(記者)

抑も、丹青の藝は文辭の學に先だつて生れ、文辭とともに榮え、文辭の能くせざる所を能くし、遂に今日の盛りを見るに至りました。

和漢名畫の徳は、古來の賢者を寫しては永く節を興し、仁義忠孝を補し、囑目の景物を描きては深く妙を現し、山川風物を受するに資するにあるは申すまでもありませぬ。即ち繪畫の使命は、觀る者をして心を遠く畫裏の妙所に遊ばしめ天地の恩を解せしめ、人倫の正を弁せしめて、人間の善美なる性質を全うせしめるに存するのであります。

これを以て上天子より下庶人に到るまで、名幅を藏するの習あるは、名幅の妙所を看取して徳を磨き情を養ひ、以て天地人三才中の最靈たる實を擧げんがために外なりませぬ。かくて藏幅の標語は、おのづから

人格者の作を藏せよ、大人物の筆を選べ

となります。こゝにおいてか、丹青の道は、單に筆端の末技に非ずして、古今の道に通ひ、民族の本然に基き、個性の胸臆より發するものであるといふことを悟らねばなりません。各時代の天才が、能くその、古道を承け新意をだすは、山深くして泉新たなるにたとふる習ひであります。

東洋畫の如く旨深く意高き藝に至つては、他の技藝の如く、單純なる修行（即ち人格の一部分的修練）を以てしては達し難いのであります。斯いふは日本畫到達の途は太しく複雑多端なりといふのではなく東洋人として、日本男兒として、志士仁人たるに要する人格の全般的修養を意味し、部分的末技に墮せざるをいふのであります。その内面根本の最大條件は人格の原理となるべき志氣を養ふこととであります。

志氣にして純一ならば一人格純一に、志氣にして卓落ならば全人格卓落たらむ。風骨高大なると否と、藝風優美なると否と、要は一片の志氣に存するのであります。しかしてこの志氣たる傳へて傳へ難く教へ難し。雄偉なる先達と順心の後進と一脈感應して不立文字的に傳ふるのであります。

今、後進、概ね順心なりといへども、これが先達をなす東京美術學校校長以下、感應傳心の師標たるに値するもの果して幾人かありませうか。恐らくは^{〔五〕}じふ中一をだに得ざらんと思ひます。實に、我美術學校は日本男兒の養成に當るや西歐人の模^{〔四〕}ほう者を教育せんとするや。君子を作らんとするや小人を養はんとするや、^{〔四〕}「ゆふら」を培はんとするや、いばらに灌がむとするや。純麗の花をさかし

めんと欲するにや、汚濁の萎草を長ぜしめんとするにや。本領を内發せんことを願ふにや。異端を外模せんことを勸むるにや。

畫の貴き所以のものは作者貴き故であります。畫道の尊くかつ大なる所以のものは古よりこのかた畫壇の先達、或は尊く或は大なりしを以てあります。帝王公卿相將士夫學士にして畫を作して始めて人間最高の境に到れるもの少なからず。又初めより一畫人たるの身を以てしてその作の具有する高興幽懷深義、聖賢經書を著はする徳に譲らざるものあり、義をふみ仁を行ふにおいて大臣大將に劣らざるものあり。あゝ、丹青における人と藝と相關するの何ぞ深くして大なるやを眞に思はしむるのであります。

(二)

然らば則ち、後素の學法は、民族傳來の精神に歸り、か^{〔四〕}ふ國の民をして性善に意正ならしめるべく、人格養成を第一條件に置き、如何様に繪を教へるかといふ前に如何なる人物を養ふかといふことを主眼としたものであらねばなりません。藝術と民族性との關係は香氣の花におけるが如く、梅に梅の香あり、^{〔四〕}らん^{〔四〕}らんのかをりあるが如く、本來の特色は自然に發揮せられるものであります。作者と作品とは、玉の音は玉から出、石の音は石から出る如く、必然的なものであります。我々は、如何なる民族であるかをさとり、人物養成において玉をつくるか石をつくるかに腹をきめねばなりません。技巧の模倣に光陰を徒消して俗工を養ふが如きは、どうして許さるべきでありませうや。

それ天り^{〔四〕}ん英雄兒にあらずんば龍虎の圖はなし難く、哲人の思ひ無くして古賢の像は寫し難く、天成の雅士にあらずして花^{〔四〕}きの美は

描き難く、好友を喜ぶものにあらずば、^{〔麗〕}毛のききはなし難く、古學を慕ふ者に非ずんば、煙浦の遠きは現し難いのであります。^{〔麗〕}だ夫にしてせう峻を圖し、貧奴にして清流を作らんとするも任に非ざる可言なしでありませう。これをもつて、いやしくも繪事をしてうつとして茂りさん^{〔麗〕}として輝かしめんと欲せば、まづ繪事に従ひ遊ぶ學徒の人となり養ふ所が無くてはなりません。すなはち、東京美術學校は雄偉の人物を作ること全力を盡さなくてはならないのであります。

翻つて吾が母校東京美術學校の現状を見るに、その教育方針は創立當初と著るしく相遠ざかり、祖國の本領を解せず、旨無く空しく國民を誤ること、一大痛恨事に屬するのであります。美術學校としては官設の最高機關として祖國の藝道をいやが上にもし盛ならしむべき任務の吾が母校は、王法を奉じ國^{〔麗〕}を食みつゝ近來何そ甚だしくその任務に背いてゐることでありませう、主力を洋畫に注ぎ、國民性のすう向^{〔麗〕}に戻り、藝術教育の大本を忘れ、たう／＼相率めて洋畫の俗態に淫潤し、東洋畫の高遠なる作風を失つて、動もすれば外面皮相の描寫にとゞまるか、乃至は低落なる感覺表現を以て得たりとしてゐるのであります。

このまゝなほ數年を假借せば、洋畫の濁流^{〔麗〕}はん濫して日本畫の高韻をみだし、異邦の俗巧跳りやうして神州の氣格を傷ひ、祖國の正聲をいん滅に歸せしむこと、紫の朱を奪ふが如きでありませう。かくの如きは、東京美術學校の卒業生として舊職員として、將一國民として堪へ難い悲憤を覺えるのであります。

北米合衆國の如きは、自國に藝術無く、元來が歐洲人の植民地で

ありましたから、歐洲の畫法を以て教育するのに何のあやしむべきを認めませぬが、我國の場合は、往昔より高級民族として古文明の傳承と包藏と、世界に冠たる以上、純に日本畫家を養ふべきでありました。それを、日本畫科に伴はしむるに洋畫科をもつてしたるは、時の當局者の親切より出でたでありませうけれど、今日、主客顛倒して洋畫が不當にはびこるに到つたことを見れば、親切はむしろ一失策に數ふべきかと思はれます。

この度東京美術學校は一洋畫家（正しくいへば洋畫法の模倣者）をその校長に戴きましたが、率直に申せば不肖は多大の不満を禁ずることが出来ませぬ。不肖は現校長に對しいさゝかの私怨あるに非ざといへども、國民性の本然に立歸り、美術教育の眞意義を一考致し斷固として現校長を排撃せねばならぬ覺悟を有してゐます。

(三)

從來とても母校に對する不満はありました。學校側でも、人物養成といふことに目ざめず、校長始め教員各位が、人物的に學生から仰慕せらるることなく、従つて學生は、校長に對し教員に對し、何ら畏敬も感激も無く、延いて學生自らの修學においても白熱した精進が得られない狀に置かれてあります。學生達の若く純な魂は、草木ならば感光力に鋭きも、周圍の光が全く混濁してゐるとき、どうしてその感光欲を全うすることが出来ませうか。これらの情弊は直に帝國美術院にその惡氣を漂ひ通はし、天下の藝道を毒し、幾多の新人を汚してゐるのであります。

上記の弊をきやう救するの道は唯祖國に忠實なる學校とする外にありませぬ。原則として東京美術學校は、日本畫家本來の修學法に

法り、人物教育を第一條件とせねばなりません。その校長は眞に國粹的高人たることを要し、(必ずしも藝術家たるを求めず)教員各位は能くその校長の國粹精神と和して、眞個の日本男兒をつくることを心がけねばなりません。然るときは、校長に對する社會や學生の尊敬よりして、勢ひ日本志士願者を増し、學生もさつさうたる意氣に滿ち、慧可斷臂の勇を以て勉強し、我この祖國藝術の神器を繼がんとして勇猛精進するであります。

今それ、帝國は、内外重大危機に直面し、民を擧つて祖國愛に燃え、民族意識に覺せいし、外交を始めとして諸般の國策益自主的ならんとしてをります。この傾向は民族の本領をもつとも正調に發揮し、國民の團結心を一層結束集中せしむる途にして、時難にかち國運發展に向ふべき瑞兆として吾人悦んでをりますのに、ひとり東京美術學校のみは、何を好んで右の瑞兆に逆行するのでありませんか? 事は一校に關せず、一國の藝道に關し、一大民族の盛衰に關します。いかでか等閑に付すべきではありません。

蒙古王俄に興るや陸の連る限りその武に屈せざるものなかりしが、獨り宋三百年の文化を屈することが出來ず、却て宋代名書畫に畏服せられ、僅々八十餘年にして亡び去るに至りました。宋の文化今に至る迄、文と畫と世界に並び無くへいとして史上に輝くものあるは、宋代の君臣深く心を藝學にもちひ、漢唐に溯り、夏殷周に溯り、尙堯舜に溯りてその祖先の眞風を慕求し、民族の本性に従つて藝術を練磨したからであります。故に後世の學者は宋のえん武をそしらずして、宋の君臣能く思ひを學藝に致したるを譽むるのであります。祖國の藝學に携はるもの又省むべきではありませんか。

日本畫の高致は異邦の識者も驚歎して措かざる所で、大に我が國光を揚げ民風を高めるに與り、國際親善に大きな扶けともなつてをります。その海外進出は有司も獎勵するところであり、又外國では日本人の洋畫の如きは更に求めませぬ。しかし、斯の祖國藝道の培養の任に當る吾が東京美術學校が、主力を洋畫に費し、洋畫家長とするは、矛盾これより甚だしきはないと思ひます。

不肖は天子國の民として尙きよう手し獨善こう安をぬすまなか、一には時の民として祖國に不忠を演じ、二には古來の畫聖畫賢に對し相承を果さざるの罪を得るのをおそれ、敢てけつ起し鼓を鳴らして天下の職者に訴ふる次第であります。

願はくは滿天下の藝術家、否日本畫家よ、官私の論に別無く、もろともに祖國藝術を尊べ、一齊に奮起して藝術の王國日本畫の殿堂を守れ。卿らの任務はこの外に何もないのであります。そしてまづ手始めに東京美術學校をして、大日本帝國の美術學校たらしめよ。フランス共和國屬領の美術學校でもあるかの様な觀を呈せしむるなかれと、私は祈るものであります。(完)

(昭和七年六月十、十一、十二日『東京朝日新聞』)

本篇は『美之國』第八卷第七号(昭和七年七月)『アトリエ』第九卷第八号(同年八月)等に転載された。『塔影』第八卷第七号(同年七月)には文語体で記された同一内容のものが掲載されたが、これは『大觀の画論』(平成五年、横山大觀記念館)に収録されている。

このように数誌が大觀の意見を紹介し、あるいは洋画対国画という

テーマで特集を組むなどしたもの、この時点では議論のみに止った。大観の意見が実効を奏するのは昭和十九年本校改革の際においてである。

本校第一期生にして岡倉天心の遺志を継ぐ者たらんとする大観は、本校に対して常に関心を寄せていた。大観と対立する人々の間に「大観は美校を乗取ろうとしていた」ということが言われたが、小杉放菴の日記『日本美術院百年史』第四巻。平成六年、日本美術院の次の記述を見ると、それも全く事実無根とは言えないのではないかと思われる。

〔大正九年九月七日〕……白〔吉田白嶺〕君近来帝国美術院の大観、観山両君に對する運動に就て憂惧してあり。予にすゝめて大観君を説いて金モールの思ひを断たしめんとす。平常ならば易き事ながら此際いたしかゆし也。されど同行して茅町を訪ひ、談此事に及べば、大観氏、いや何等の觀誘も未だ受け居らず。若しその如き交渉あらんには、美術学校を全部予等の手に渡しなば命を拜せんと答へんと云ふ。老雄壮快也。

〔同年十月四日〕……途大観君を訪ふ。大観君南次官について談る處あり。次官は大観君を帝展に拉致せんとし大観君はさらば美術学校を全部任せよと云ふ。是は出来ぬ相談也。予、次官大英断をもてそれを決行したりとて、大観君は黒田〔清輝〕氏以下の大朋黨と恨を構へざる可らず。此事云ひ易からず。日本畫部を全部任せ、次に工藝部を削り去る位の處にては折合はずや。その後油繪黨と事を構ふるの勢とならば強きもの正しきも〔の〕敗

れざるべし、と云ふ。大観君もそのやうなる心あるらし。……

⑥ 人事刷新

昭和七年には校長の更迭とともに、「学校近事」に記されているように広範囲の教員異動があった。異動後の職員は次のとおりである。

職員

校長	和田 英作	東京
名譽教授	高村 光雲	東京
	正木 直彦	東京
	久米桂一郎	佐賀
主任教授	川合芳三郎	東京 東玉堂
教授	結城 貞松	東京 東素明
教授	松岡 輝夫	東京 東映丘
教授	平福 貞藏	東京 東百穂
理事教授	小泉 勝爾	東京 東青堂
助教授	山田 廉崎	東京 玉
助教授	常岡 文龜	兵庫 庫
主任教授	岡田三郎助	東京
教授	藤島 武二	鹿兒島